

目標の5ヶ国語、 いまだ話せず

北村 豊

私は高校は、故郷の奈良市立一条高等学校に進学、そこには当時も全国でも珍しい英語科があった。

日本初の英語科が高校に設置されたのは1951年のことで、何と私の母校であったことを最近になって知った。同校は、2005年4月には文部科学省より「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」研究開発校に指定された。

この高校では、当時アメリカンフィールドサービスの交換留学生がいて、英作文の授業などにも「お手伝い」に来てくれていたことを思い出す。そんな環境で得た私にとつての

貴重な経験が「外国語でのコミュニケーション」が、とても楽しい、ということであった。

このことに味を占めた私は、休日に奈良公園に行き、下手な英語で外国人観光客のガイドを買って出たことを思い出す。案内された外国人は、きつと迷惑だったことだろう。今さら遅いが、ゴメンナサイ。

その頃、私は偶然にも本屋で何と20カ国語以上を自由に話せる日本人の手記を見つけ、それを読み耽った。これを期に、私は一生の内最低「5ヶ国語は喋れるようになるろ!!」とコミットしたのであった。

しかしである！69歳に近いというのに未だに日本語、英語、マレー語、インドネシア語の4ヶ国語しか話せない。

かつて私が、青年海外協力隊でマレーシア国立先住民病院での3年間の活動中は、華人やインド人のドクターとは英語で、そしてマレー人やジャングル奥地の巡回診療では、マレー語と使い分けることが多かった。現地に溶け込んだ生活は、ポリグロットになれたのみならず、私の心を豊かにしてくれたのである。帰国してからも家内によれば、私は時々、マレー語や英語で寝言を喋っているそうである。たわ言は昼間に度々発している自覚はあるのだが…。

コミュニケーションの楽しみは今でも変わらず、駅や都会等で、困っていきそうな外国人

には、自然と歩み寄っていき癖が付いてしまったが、そこには「未知への遭遇」を楽しむ自分がいるのであった。

先週、何気ない診療椅子上での会話だったが、高校三年生の彼女は、大学で英語を専攻し、しかも「英語をしゃべれるようになりたい」と何と嬉しい言葉を発してくれたことであらうか！彼女が英語でのコミュニケーションの楽しさを知り、それをきっかけに豊かな人生を送ってくれることを願った。

（小布施町 信州口腔外科インプラントセンター所長）